



Hāf a A d a i

令和5年4月28日
グアム日本人学校
学校だより
5月号
校長 井手瑞樹

教えることと育てること

新学期が始まりました。子どもたちの顔は生き生きとしています。元気な声が朝から響き渡り、明るい笑顔があふれています。新しい学びに、新しい出会いに、子どもたちの心は大きく弾んでいるようです。始業式で、ある子どもが次のような事を発表していました。「私は漢字が苦手なので、一生懸命漢字の練習をします。授業をしっかり受け、おうちでも宿題を毎日欠かさずがんばります。」子どもたちそれぞれが、目標をもって、新年度を迎えていることを強く感じました。



私は、この純粋な子どもたちの思いに心を洗われます。希望を持って、今まさに突き進もうとする明るい姿に、強く心をひかれます。私たち大人は、その気持ちをいかに支え、伸ばしていくかを真剣に考え、行動に移さなければならないと改めて思います。子どもたちが、一つ一つできることを増やしていくことは、本人のみならず、それを周りで見ている私たち自身が嬉しくなるものです。そして感動をするものです。幼児が自分の足で立てるようになるだけで、見ている私たちが感動するあの瞬間です。素直に「よくできたねえ。上手！上手！」とその子と一緒に声を出して喜んでいる場面が浮かんできませんか。その感動が子どもに伝わり、その子の更なる意欲へとつながっていくのだと思います。

私が好きな評論家に養老孟司さんがいらっしゃいます。彼は、その著書の中で、子どもを育てるときに大事なのは、「手入れ」という考え方ですと述べておられます。例えば、植物が成長するとき、風が吹いたり、日が照ったり、時には嵐が来たりと様々な自然条件に遭遇しますが、そのときに、棒で支えてやったり、水をやったり、風よけをしてやったりしながら、植物が自ら成長するのを助けてやること、時に変な方向へ伸びていこうとするのを横から手を添えて軌道修正してやること、それらはまさに植物が本来持っている力を引き出してやることであると述べておられるのです。そして、子どもを育てるといふのは、これと同じだということです。



それと同時に大切なことは、子ども自身に、我慢、継続、積み重ねの重要性を認識させることです。人間誰しもきついこと、苦しいことから逃れたいと思うものです。しかし、そこに挑戦していかない限り、知識や技能の習得はありません。成就感がなく、更なる向上意欲にもつながっていきません。したがって、大人は子どもに対し、ただ手を貸して楽をさせるのではなく、自ら困難に立ち向かっていこうとするたくましさを身に付けさせなければなりません。前述の「手入れ」という思想には、このことも当然含まれているのです。すなわち、教えることも重要だということです。（「教育」という言葉の由来です。）



その上で私たちが賢く対処しなければならないことは、一方に偏らないこと、つまり、いわゆる甘やかしすぎないことであり、逆に、ただ厳しすぎるべきではないということです。それらのバランスに最大限、気を配らなければなりません。子どもを信じなければいけませんし、疑いの目も持たなければなりません。これらを間違うと大変なことになります。

新学期という節目を大切に、子どもたちの「こうなりたい」という気持ちを十分に受け止めながら、私たち教員と保護者の皆様が手を携えて、「教育」に当たって参りましょう。どうぞよろしくお願いいたします。